

# 日本史 B

## 1 自主的な課題追究がなされるように配慮した授業展開例 1

<主題> 日本の食文化における外来の食

<解説> 日本人の食文化の特徴を、「日本的なものは何か」という問題意識を出発点とし、仮説を検証する過程で具体的な追究を通して考察させる。併せて、日本の歴史と食の外来にどのような関係があるのかにも着目した。

## 2 地域素材の教材化に配慮した授業展開例

<主題> 輪中と治水の歴史

<解説> 身近な生活の場を教材とすることによって、生徒の関心・意欲を高め、地域の歴史や文化を多面的に考察させるとともに、地域調査・資料館の利用・文献研究なども取り入れて、多様な歴史学習の方法を身につけさせるようにした。

## 3 自主的な課題追究がなされるように配慮した授業展開例 1

<主題> 世界の中の日本・・・日韓関係を中心に

<解説> 2002年W杯サッカーの開催によって日韓関係が親密化したこと題材にしつつ、いまだに両国間に存在する複雑な問題を浮き彫りにすることによって、日韓間の過去の関係について課題追究をさせ、今後の両国間の関係について、意見を持てるようにした。

## 4 資料や体験談を活用し主体的追究がされるように配慮した授業展開例

<主題> 第二次世界大戦と日本

<解説> 戦争についての表面的な理解だけではなく、外部講師による体験談の聞き取り等を通して、その悲惨さ困難さをより具体的に把握させ、平和な国際社会構築の重要性を再認識させるように工夫した。

# 1 自主的な課題追究がなされるように配慮した授業展開例 1

教科(科目)	日本史 B	単元名	歴史の考察
本時の主題	日本の食文化における外来の食		(3時間目 / 3時間)
本時の目標	(1) 食事という身近な事例をもとにして、課題解決への予想を立て、自ら追究しようとする。【関心・意欲・態度】 (2) 日本人の食生活が、日本独自に形成されたものではなく、歴史的過程と深く関係し、外来の食材や調理法などと融合されながら形成されたことに気付く。【思考・判断】 (3) 調べた内容をレポートにわかりやすくまとめ、発表する。【技能・表現】 (4) 既習の知識を、問題解決にむけて有効に活用する。【知識・理解】		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・何が日本的な食かを考える。  ・日本的と考えた食について調べて追究する。  (1～2時間目) ----- (本時) ・調べた内容についてわかりやすく発表する。  ・各発表の要点をまとめる。 (30分)  ・食の外来が活発になっている時期を理解する。  (40分)  ・日本の食に関する特徴に気付く。  (45分)  ・自己評価や感想をまとめる。 (50分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     ・何が日本的(伝統的)な食であるのかまた、それらを構成する食材や調理法がいつ頃から日本で行われていたのか考える。                 </div> ・根拠を示しながら仮説をたてる。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     ・自分がたてた仮説を調べて検証する。                 </div> ・同様の発想をした生徒ごとにグループを作り、協力しながら仮説を検証する。 ・調べる内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・食材や調理法</li> <li>・外来のものであるならば、いつ頃、どこから流入し日本に定着したのか。</li> <li>・どのような経過を経て今日のような食が形成されたのか。</li> <li>・意外な発見。</li> </ul> ・何を使って、どのように調べればよいかを考える。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     ・調べた内容をレポートにまとめ、発表する。                 </div> ・どのように発表するかをグループで話し合い、必要な資料を作成する。 ・調べた内容について、グループごとに発表する。 ・各発表に対する各自の予想を事前に行う。 ・各発表の内容をまとめ、自分の予想と対比する。 ・各自が調べた食・食材がいつ頃日本に定着したのかを年表に記入する。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     ・食材や調理方法などが日本に定着した時期に共通性がないか、また、どの時期に食の外来が特に活発になっているかを考える。                 </div> ・食の外来が特に活発になっている時期、また、食材や調理方法などが日本に定着した時期に共通性がないかを考える。 ・日本が中国を中心とするアジア諸国や欧米の国々との交流を活発化した時代と関連づけて考える。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     ・当初にたてた仮説と対比する。                 </div> ・日本的といえる食・食材が何かを考える。 ・日本的といえる食・食材の多くが長い年月を経ながら日本の風土や嗜好にあわせて独自の食に発展したことに気づく。 ・本時の感想や気付いたことを記すとともに、自己評価を行う。	既習事項を活用して予想を立てる。 <評価方法> 挙手、発言 【関】  各自が関心をもった日本的な食について調べる。  調べ方についても考えさせる。  <評価方法> レポートを提出させ確認 【思】  調べた内容をわかりやすくまとめさせる。 より効果的な発表の方法を考えさせる。注4  他者の発表もよく聞かせ、理解を深めさせるようにする。注5 <評価方法> 発表、プリント記入、提出させ確認 【技】注7  日本的と思っていた当初の予想との違いに気付かせる。  食の外来と日本や世界の歴史との関係に気付かせる。注8  日本の食の特徴について、当初の予想と対比させながらまとめさせる。  <評価方法> プリント記入、自己評価記入、提出、確認。 【関】【知】注9	

注1  
注2  
注3

注4

注5  
注6

注7

注8

注9

## &lt; 指導上のポイントと考察 &gt;

日本人の食文化の特徴を「日本的なものは何か」という問題意識を出発点として仮説を設定させ、具体的な追究を通して仮説を検証させる。そして、その一連の活動によって、日本の食文化の特徴を見つけ出させる授業構造とする。従って、生徒自らに課題を設定させ、そこから生じた疑問を自らの調べ活動によって解決する過程を重視する。教師からの提示は最小限に留め、生徒が自らの調べ活動のなかで問題を解決し、達成感が得られるように導く。また、調べ方、まとめ方・発表の仕方も並行して学べるようにする。

## &lt; 生徒の課題追究例 &gt;

生徒が日本的と考えた例として、寿司、天ぷら、納豆、味噌汁、精進料理等があった。天ぷらについては、南蛮貿易によって伝わってきたもので、日本人の好みに合うように変えられてきたものであること、寿司については、古墳時代頃、炊いた魚や貝を米と一緒に漬けこみ、米が乳酸発酵することによって魚貝類の腐敗を防ぐ貯蔵法として伝えられており、平安時代には各国が税で納めるものの中に、鮎ずし、鮭ずしなどの記述が見られるがいずれも魚貝類の貯蔵が主目的となっていること、これが大きくかわり、今日のような寿司となるのが江戸時代で、米飯を発酵させず、酢を混ぜ、ネタを組み合わせるものとなったこと、その背景には、漁業の発展や輸送手段の進歩等が関係していることをあげた。

納豆については、大豆栽培そのものは弥生時代に始まったとされるが、納豆の製法が伝えられたのは古墳時代あたりと考えられること、そして、これも中国、韓国、南アジアなどに広く分布しており、外来の食の一つになること、また、味噌・醤油についても大豆の伝来と密接に関係するため、納豆の場合と重なること、その製法の起源は中国や朝鮮半島で、伝来も古墳時代あたりと考えられること等を発表した。

日本は常に外来の文化を受容しながら取り入れて今日の文化を創り上げてきた。食文化についても同様で、ほとんどのものが外来の食あるいは食材である。その中でも、特に外来の食が日本に受容される時代として、7・8世紀、17世紀、19世紀という3つの大きな“山”があるといわれる。この3つの時代を含め、日本が国際化を果たした時代と重なる。今回のテーマでは、こうした時期を中心に、生徒が調べて発表した内容を起点として、日本の歴史、特に諸外国とのかかわりに着目できるようにした。また、外来した食が日本に定着する仕方にも段階があり、受容・選択・変容・融合といった過程を踏みながら今日の形にたどり着く場合が多く、日本に入っからの長い歴史的過程を無視した単純な比較は困難であることにも気付かせたい。

- 注1 調べ活動は図書館を中心に行うが、書籍類のほかにもインターネットや漫画、テレビ番組などの多様なメディアを活用させる。日本史の学習で活用される資料は「古文書」類が多いが、それだけではなく、映像や写真なども活用させることで興味や関心を高めるようにする。同時に歴史が、様々な資料の読み解きによって成り立っていることに気付かせるようにする。
- 注2 情報機器の活用にあたっては、図書館の司書教諭をはじめとして、複数の先生と協力して行うようにする(ティーム=ティーチング形式の利用)。
- 注3 調べ活動が、グループの特定の個人に押しつけられることがないように、協力して取り組むように指導する。生徒相互に補完しあいながら学習を進めさせ、調べる資料、まとめ方、分かりやすい発表の仕方など、互いに意見を出して工夫させる。そのことを通して、学ぶことの楽しさを実感させたり、一連の学習活動が自己表現の場であることに気付かせる。
- 注4 発表方法はB紙、パソコンによるプレゼンテーション、オーバーヘッドプロジェクターなど、効果的な方法や機器を選ばせ、工夫させる。
- 注5 自己のテーマに対する予想だけではなく、各グループのテーマについても予想を立てさせ、関心を高める。
- 注6 各自が調べた内容についてはよく理解できるが、他者の発表内容について理解が深まらないことがよくあるので、注意深く聞かせるとともに、他者の発表の要点を書き取らせたりまとめさせたりする。また、自分が立てた予想と対比させることで関心・意欲を高める。
- 注7 生徒が調べた内容を利用し、外来の食が活発に流入した時期がわかりやすいように表示できるようにする。また、既習の事項を活用させたり、簡単な時代区分を示すことによって、外来の食が活発に流入した時期がどのような時代であったのか考えさせ、歴史的背景がつかめるようにする。
- 注8 発表内容を利用して、生徒が当初日本的な食と予想したもののほとんどが外来のものであることに気付かせる。また、何が日本的な食かについては、歴史的な発展過程と密接に関係しており、粹組み作りが難しいことに気付かせる。
- 注9 自己評価は生徒自身に取組の姿勢を振り返らせるとともに、この授業が生徒の関心・意欲、あるいは理解をどの程度深めることができたかを検証するために行う。感想は、生徒の理解度や思考力が授業実践以前とどう変わったかを知る手がかりとなるように実施する。

## 2 地域素材の教材化に配慮した授業展開例

教科(科目)	日本史 B	単元名	地域社会の歴史と文化
本時の主題	輪中の歴史と江戸幕府の大名統制 (4時間目 / 4時間)		
本時の目標	<p>(1)身近な生活の場を題材とするとともに、地域調査を実際に行うことによって、関心・意欲を高める。また、地域調査や文献研究を通して多様な歴史学習の方法を身に付けさせるとともに、文化財を保存することの意義について気付かせる。【関心・意欲・態度】</p> <p>(2)江戸時代を中心とした治水事業が、幕府の統治政策とどのような関係にあったのかを多面的・多角的に考察する。【思考・判断】</p> <p>(3)調査方法を工夫し、調べた内容をレポートにわかりやすくまとめ、発表する。【技能・表現】</p> <p>(4)輪中地域の歴史や文化を自然条件や政治的・経済的諸条件と関連付けて理解する。【知識・理解】</p>		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
<p>・ 自己の課題を設定し、追究する。</p> <p>・ わかりやすい発表ができるように、まとめかたを工夫する。</p> <p>(1～3時間目)</p> <p>-----</p> <p>(本時)</p> <p>・ 調べた内容についてわかりやすく発表する。</p> <p>・ 各発表の要点をまとめる。</p>	<p>・ 輪中の歴史や洪水との闘いがどのようにして行われてきたのか考える。</p> <p>・ 以下のテーマから関心の深いものを選んで調べる。 輪中の特色ある景観とはどのようなものか 輪中や洪水の歴史について 宝暦治水事業はどのような計画で行われたのか 薩摩義士、平田鞠負(ゆきへ)はどのような役割をはたしたのか 宝暦治水における幕府のねらいは何であったか ヨハネス＝デレーケの三川分流工事について</p> <p>・ 調べるにあたっては、海津町歴史資料館や各町図書館などを訪れる。</p> <p>・ 調べ活動にあたっては別紙資料1～8を自己のテーマにあわせて選択し活用する。</p> <p>・ 資料1は新田開発と洪水の関係を捉えさせるために利用。新田開発が進むほど洪水が増え、年貢高が減少していることに着目し、洪水対策の必要性が高まったことに気付く。</p> <p>・ 資料2と4は宝暦治水の薩摩藩の負担を考えさせるために利用。薩摩藩の財政を圧迫していたことに気付き大名統制の一環としてとらえる。</p> <p>・ 資料3と6は江戸幕府の治水対策を考察させるために利用。長良川及び揖斐川の破堤回数に比べ、木曾川の破堤回数が少ないことに着目し、尾張藩と他藩の関係に気付く。</p> <p>・ 資料5は生徒自身のルーツを調べさせるために利用。</p> <p>・ 資料7は宝暦治水工事の内容を明確にするため利用。自分の身近な場所が舞台になっていることを再認識する。</p> <p>・ 資料8は宝暦治水のねらいを所領関係をもとに多面的に捉えさせるために利用。</p> <p>・ ~ について各班が調べた内容を発表する。</p> <p>・ については、水屋、堀田、水防倉庫、切り割り堤等を具体的に調べ、洪水とともに暮らす人々の苦勞と、これを克服するために様々な工夫がなされてきたことについて調べ、発表する。</p> <p>・ については、資料1・3・5をもとにして、輪中の形成過程や、特に近世に入り新田開発が進むにつれ洪水が増え、治水対策が重要な問題になってきたことについてまとめるとともに、実際の洪水被害の深刻さを聞き取り調査などを行いながら発表する。</p> <p>・ については、資料7等を参考にして、宝暦治水事業</p>	<p>既習知識をもとに考えさせるとともに、より多面的に追究させるようにする。</p> <p>各自が関心をもったテーマについて調べる。</p> <p>何を用いて調べるかを考える。</p> <p>資料館などの利用にあたってはマナーを遵守させるとともに、必要な資料は確実に記録させる。</p> <p>自己のテーマにあった資料を選び取らせ、追究を深めさせる。</p> <p>&lt;評価方法&gt; レポートを提出させ、確認 【思】</p> <p>効果的な発表の方法を考える。</p> <p>他者の発表をよく聞き理解を深める。</p> <p>それぞれの発表に対して補足やまとめを行う。</p>	

注1

注2

注3

注4

注5

注6

<p>(40分)</p> <p>・自己評価や感想をまとめる。</p> <p>(50分)</p>	<p>が洪水対策としてどのような計画でなされたのかを公表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ については、資料2・4等を参考に、宝暦治水事業の困難さを薩摩藩の財政状況や工事の様子をもとに発表する。</li> <li>・ については、資料3・6・8等を参考にして、宝暦治水事業を進める上で、幕府から示された条件(工事に必要な人員・物資の現地調達等)や、この地域の所領関係(幕府領、尾張藩領、高須藩領が入り組み、統一的な治水事業ができなかったこと、それが木曾川右岸の治水対策を抑え、木曾川左岸の尾張藩領の洪水増加を防ぐことになる等)から宝暦治水事業や幕府の大名統制について多面的に考察し発表する。</li> <li>・ については、今日の3河川の流路が作られたことについて発表する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>・ 発表を通して、気付いたことや感想をまとめるとともに、自己評価を行う。</p> </div> <p>・ 各班の発表を相互に評価する。</p>	<p>&lt;評価方法&gt; 発表</p> <p>【技】</p> <p>自己の取組を振り返り、次回への動機づけとする。 理解できたことを確認する。</p> <p>&lt;評価方法&gt; 重要事項を発問により確認【知】 プリントに記入させ、提出【関】</p>
---	--	--

#### <指導上のポイントと考察>

本校が位置する海津町は、輪中地帯として有名で、大雨やそれに伴う洪水から生活を守る工夫が古くから粘り強く続けられてきた所である。厳しい自然条件を克服するためにどのような努力が行われてきたのかを、代表的事例である宝暦治水を中心に追究させ、政治的・経済的諸条件と関連付けて考察させるようにする。

宝暦治水は木曾三川の分流工事として名高く、三川流域193カ村に及んで行われたため、本校生徒のほとんどが少なからずその事業についての知識を有しているし、小中学校の時に調査活動を行った経験を持つ生徒もいる。生徒の身近な生活の場や取組やすい事例を取り上げることによって、歴史学習に対する関心・意欲を高めるようにする。

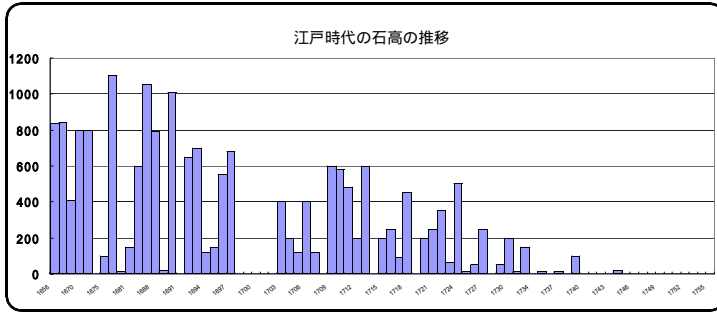
宝暦治水については、多くの場合、平田靱負ら薩摩義士的美談として扱われがちである。この治水事業の実態を多角的・多面的に追究させることによって江戸幕府の大名統制策の実際に迫り、幕府と大名の関係をより具体的に把握できるようにする。また、追究にあたっては、既習の知識を活用させるとともに、さらに深めさせるようにする。そのため、有効な資料をあらかじめピックアップしておくとともに、学校の図書館の資料やインターネットでの検索はもとより、歴史資料館など関連する史跡などを見学したり、聞き取り調査をさせるなど多様な活動を取り入れるようにした。

追究した内容はレポートやWEBページにまとめさせ、わかりやすく発表させ、創造性や表現力を高めるようにする。この際、調べ方、まとめ方、発表の仕方なども並行して学べるように実施する。

- 注1 漠然と調べさせるのではなく、調べる項目を明確に示すようにする。特に、意欲の乏しい生徒に対しては、調べ活動に用いる適切な資料なども予め準備する。
- 注2 地域調査は町の歴史資料館を中心に実施する。時間割変更で午後の2時間を使って実施する。
- 注3 地域調査にあたってはモラルやエチケットを再確認する。また、地域の人々とのコミュニケーションの大切さや自ら学ぶ喜びを体感できるようにする。
- 注4 資料の収集にあたっては文献から抜き出すだけでなく、写真撮影や地図の作成、あるいは聞き取り調査なども取り入れ、発表活動でわかりやすく提示できるように工夫させる。
- 注5 発表方法は、パソコンによるプレゼンテーションなど、効果的な方法や機器を選ばせ、工夫させる。
- 注6 各自が調べた内容についてはよく理解できるが、他者の発表内容について理解が深まらないことがよくあるので、注意深く聞かせるとともに、他者の発表の要点を書き取らせたりまとめさせたりする。

授業に利用した資料の一部

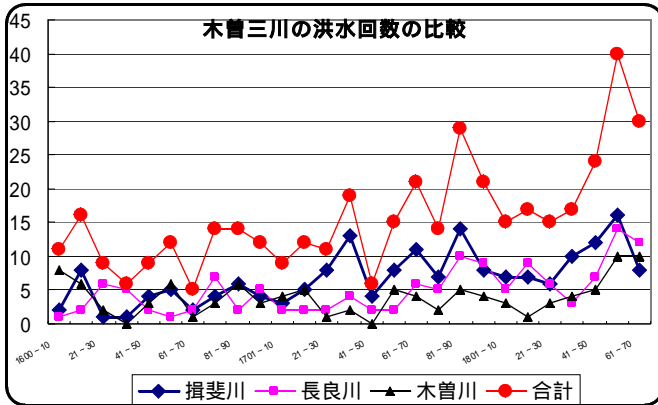
資料1 本阿弥新田の年貢高の推移(「輪中と治水」より作成)



資料2 薩摩藩の財政状況(「鹿児島県の歴史」より)

年代	借銀高(金両)
1616(元和2年)	1000貫余 (2万両)
1632(寛永9年)	7000貫余 (14万両)
1640(寛永17年)	21000貫余 (34.5万両)
1749(寛延2年)	34000貫余 (56万両)
1754(宝暦4年)	40000貫余 (66万両)
1801(享和元年)	72600貫余(117万両)
1807(文化4年)	76128貫余(126万両)
1827(文政10年)	320000貫余(500万両)

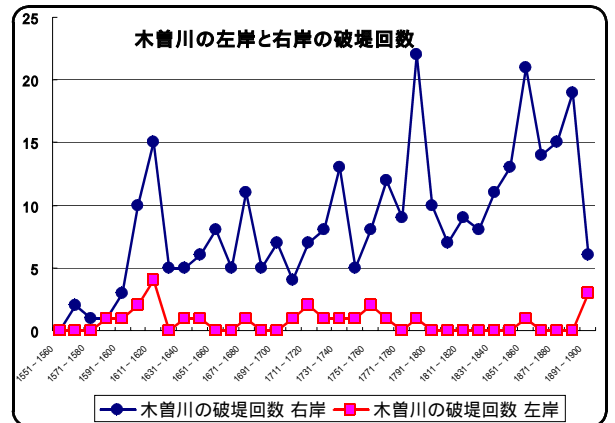
資料3 木曾三川別水害発生件数(「岐阜県災異誌」より作成)



資料4 宝暦治水の費用負担(「薩摩義士」より作成)

薩摩(鹿児島)・・・美濃(岐阜)	約1200km
加わった薩摩藩の人	約1000人
・切腹した人	53人
・病死した人	33人
使った費用	約40万両 (約320億円)
幕府の使った費用	約1万両 (約8億円)

資料6 木曾川の左岸と右岸の破堤回数(「輪中と治水」より)



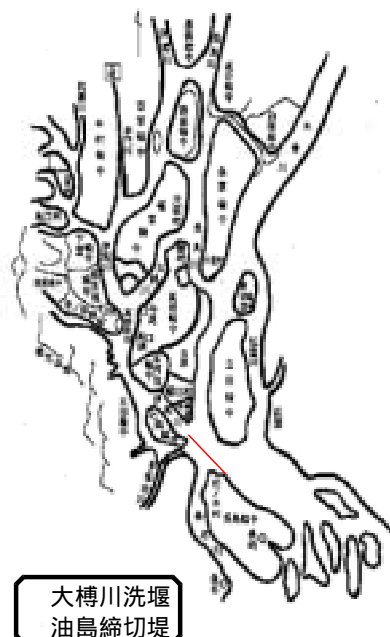
資料5 岐阜県内の主な輪中の形成年次

(「輪中と治水」より)

年代	揖斐川以西	揖斐川～長良川	
江戸時代	・下笠(1615～36)	・古高須(1600～06)	
	・根古地(1641頃)	・金廻(1601～18)	
	・太田(1648)	・福東(1625)	
	・大垣(1653)	・本阿弥(1648)	
	・飯之木頃(1656)	・牧(1650)	
	・釜段(1658)	・帆引新田(1657)	
	・大巻(1661)	・森部(1665)	
	・高柳(1670)	・墨俣(1668)	
	宝暦治水	・多芸(1670)	
		・江月(1693)	
・祖父江(1693)			
・綾野(1693)		・穂積(1705)	
・蛇持(1709)		・古橋(1705)	
宝暦治水	・室原(1709)	・高須(1732)	
	・大墳(1797頃)	・牛牧(1757)	
		・河渡(1764)	
		・則武(1802頃)	
		・島(1831)	
江戸時代末		・大明神(1839)	
		・中須(1840)	
		・中村(1841)	
明治以降	・十六(1869)	・福東(1870)	
	・静里(1875)	・北今ヶ淵(1872)	

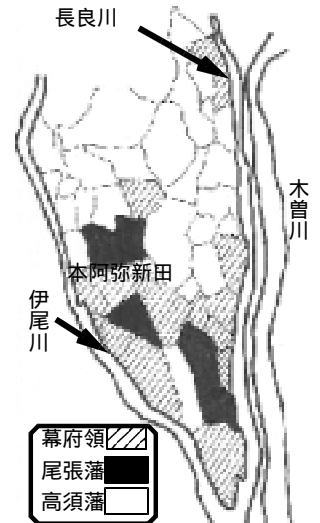
資料7 宝暦治水の主な工事計画

(「薩摩御手伝普請所目論見絵図」より作成)



資料8 江戸時代末期の領地

(『海津町史』より)



大樽川洗堰  
油島締切堤

### 3 自主的な課題追究がなされるように配慮した授業展開例

教科(科目)	日本史 B	単元名	歴史の追究
本時の主題	世界の中の日本(日韓関係を中心に) (4時間目 / 4時間)		
本時の目標	<p>(1)親密化を増した日韓関係を背景に、両国の歴史への関心を高めるとともに、現在まで依然として残る日韓間の問題が、日韓併合を中心とする日本の朝鮮支配に起因することに気付くとともに今後のより良い日韓関係、さらにはアジア近隣諸国との関係の在り方について考える。 【思考・判断】</p> <p>(2)調べた内容をレポートにわかりやすくまとめ、発表する。 【技能・表現】</p>		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
<p>・親密化を増した日韓関係をイメージする。</p> <p>・日韓関係の問題点を例示し、その内容をまとめる。</p> <p>・日韓関係の問題点を発表する。</p> <p>・問題点の内容を理解する。</p> <p>・問題の原因が何かについて仮説を立てさせる。 (1~3時間目)</p> <hr/> <p>(本時)</p> <p>・近・現代の日韓関係の概略を理解する。</p> <p>・日韓関係の歴史を調べる。 (35分)</p> <p>・現代の諸問題と日本の歴史を関連づける。 (40分)</p> <p>・日韓関係の今後の在り方についてまとめる。</p> <p>・本時の自己評価を行う。 (50分)</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・W杯サッカーの共催などでこれまで以上に日韓関係が親密化したことを確認する。</p> </div> <p>・W杯サッカーの共催で日韓関係の親密化を伝えるニュースを視聴する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・親密化が進んでいる日韓間に依然としてどのような問題があるかを考え、レポートにまとめる。</p> </div> <p>調べる内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・W杯開催地や大会名決定の経緯</li> <li>・日韓文化交流問題</li> <li>・在日韓国朝鮮人問題</li> <li>・日韓教科書問題などを取り上げる。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・調べた問題点を発表する。</p> </div> <p>・各発表の要点をまとめる</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・これらの問題がなぜ起きているのかを考える。</p> </div> <p>・明治維新以降の日韓両国の係わり合いを理解する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・冒頭で調べた問題や感情的なしこりがいつ、どのようにして生まれてきたのかを具体的に調べ、発表する。</p> </div> <p>調べる内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国併合 ・創氏改名 ・強制連行</li> <li>・皇民化教育 ・三・一運動など</li> </ul> <p>・何を使って、どのように調べればよいかを考える。</p> <p>・調べた内容をレポートにまとめる。まとめ方はレポート用紙、ワープロ、新聞形式など各人で選択する。</p> <p>・どのように発表するかを考え、必要な資料を準備する。</p> <p>・調べた内容について発表する。</p> <p>・各発表の要点をまとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・当初の問題がどうして今も問題となっているかについて、予想と対比しながらまとめる。</p> </div> <p>・韓国民の心情に気付く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>・今後の両国の関係がどうあるべきか、自分たち日本人がどう関わっていくべきかを考え、発表する。</p> </div> <p>・自分の意見をまとめる。</p> <p>・本時の気付いたことや感想をまとめるとともに、自己評価を行う。</p>	<p>身近な事柄をとりあげ、関心を高める。 感想を発表させる。 &lt;評価方法&gt; 発問、挙手、意見発表</p> <p style="text-align: right;">【関】</p> <p>新聞記事やインターネット等を利用して現在の問題を調べさせ、わかりやすくまとめさせる。</p> <p style="text-align: right;">注1</p> <p style="text-align: right;">注2</p> <p>&lt;評価方法&gt; 発表</p> <p style="text-align: right;">【技】</p> <p>当初の親密と考えた日韓関係とのギャップに気付かせる。</p> <p style="text-align: right;">注3</p> <p>興味を持った項目について調べる</p> <p>すすんで課題に取り組みさせ、原因や理由などについて考えさせ、わかりやすくまとめさせる。</p> <p style="text-align: right;">注4</p> <p>&lt;評価方法&gt; 発表、レポートを提出させ確認</p> <p style="text-align: right;">【技】</p> <p>他者の発表をよく聞き理解を深める。</p> <p>当初の諸問題と日韓の歴史を関連付けてとらえさせる。</p> <p style="text-align: right;">注5</p> <p>今後の日韓関係あるいはアジア諸国との関係の在り方について考えまとめさせる。</p> <p>&lt;評価方法&gt; プリントに記入させ、提出・確認</p> <p style="text-align: right;">【思】</p> <p style="text-align: right;">注6</p>	

< 指導上のポイントと考察 >

日韓共催の2002年W杯サッカーは日韓関係を考えさせる上で、また、生徒の関心・意欲・態度を引き出す上でも好材料と考え利用した。この大会を通して、日韓関係の親密さや相互理解の深まりを強調しながら、その一方で日韓間が抱える諸問題や国民感情とのギャップに気付かせ、学習の動機付けとする。そして、日韓両国が克服しなければならない「過去」即ち、かつての植民地支配についての課題追究を実践させることによって、過去の両国の関係を正確に把握させるとともに、これらの問題解決のためにどのような取組が必要なのか、自分がどうかかわっていくべきなのかについての問題意識を高め、自身もアジアの一員であることの自覚を醸成するようにする。同時に、生徒が一連の調べ学習を通して課題解決能力を、また、まとめ学習・発表学習を通して表現能力を身に付けることができるように指導する。

日韓関係の取り扱いにおいては、客観性を第一とする。できれば、韓国だけでなくアジア各国と日本との関係にも言及したい。アジアから見た日本、日本から見たアジアなど、両面からアジアの国際関係にアプローチするのも興味深い。

- 注1 大会中の代表的なシーンを引き出したり、提示したりして関心・意欲・態度を高める。
- 注2 冒頭でイメージした日韓の緊密な関係とのギャップが浮き彫りになるように提示する。例えば、W杯の開催地決定までのいきさつや大会名をめぐる対立などを例示し、日韓間の特別な関係や感情の存在を理解できるようにする。
- 注3 中学校やこれまでの学習、あるいは各種メディアを通して定着している知識を活用させ、各自で仮説を立てさせる。  
多くの生徒は過去の植民地支配に関係するものにとらえるが、その実態についての知識は充分ではないので、明治維新以降の日韓関係全体や植民地支配についてより深く追究させるように助言する。
- 注4 調べ活動では、生徒相互に補完しあいながら学習を進めさせ、調べる資料、まとめ方、分かりやすい発表の仕方など互いに意見を出して工夫させる。
- 注5 当初に調べた問題と日韓間の歴史にどのようなつながりがあるのかをきちんと整理させるようにする。また、日韓間に見られる関係が朝鮮半島全体、あるいは中国や東南アジア諸国についても少なからず当てはまることに言及する。
- 注6 今後の日韓関係がどのようにあるべきか、どのように接するべきか各自の考えを持たせる。この際、日本と韓国の方に偏った見方ではなく、相互理解の深化や協力関係の強化など問題を乗り越える視点から考えさせるようにする。

\* 近年の日韓文化交流の主な動き

1998	キム・デジュン大統領、文化観光省報告を受け、条件付で日本の大衆文化受け入れを表明。
	第一次日本大衆文化開放として映画（三大国際映画祭受賞作品）ビデオ、出版部門を解禁。
	[映画] 『HANA-BI』（北野武監督）、『影武者』、『羅生門』（黒沢明監督）初の全国公開。
	[音楽] ドリームズ・カム・トゥルーの英語曲CD発売不許可。
1999	第二次日本大衆文化開放策で、約70の国際映画祭受賞作品解禁。アニメは除外。2000席以下の室内での日本語の歌謡公演解禁。
2000	[音楽] 釜山国際ロックフェスティバルでSIAM SHADEが日本語で公演。CHAGE&ASKAソウル公演。
	[映画] 『シュリ』大ヒット。韓国映画の上映相次ぐ（於：日本）。
	第三次日本文化開放策で、日本歌謡公演の全国開放、劇場用アニメの一部とすべての一般映画の上映など許可、CD（日本語以外の歌）、パソコンゲームソフトなどを解禁。
	CHAGE&ASKAソウル公演、英語版CDリリース。ドリームズ・カム・トゥルー英語版CDで韓国デビュー。
	尾崎豊の「I Love You」をPOSITIONというアーティストがカバーして、50万枚の大ヒット（他に桑田圭祐、因幡晃、玉置浩二、徳永英明の韓国語カバーとPOSITIONのオリジナル曲が収録）。



## 4 資料や講師の体験談を活用し主体的追究がされるように配慮した授業展開例

教科(科目)	日本史 B	単元名	第二次世界大戦
本時の主題	戦争と国民生活 <span style="float: right;">本時(3時間目 / 4時間)</span>		
本時の 目 標	(1)日中戦争や太平洋戦争中の国民生活、国民の意識、経済力などについて理解するとともに、資料や講師の体験談を聞くことによって、興味・関心を高める。また、聞き取り調査など多様な歴史学習の方法を身につける。【関心・意欲・態度】 (2)戦争が国民生活にどのような影響を与えたのかを考えることによって、平和維持の大切さを再認識する。【思考・判断】 (3)資料を的確に読み取り、調べた内容をわかりやすくまとめて発表する。【技能・表現】 (4)国民生活の変化を戦争の経過と関連づけて理解する。【知識・理解】		
指導の内容・ねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・戦争に向かう国民意識について考え理解する。  (10分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・戦争中の国民意識はどのようなであったのかを考える。           </div> ・資料1から人口増殖を図る政策を読み取る。 ・資料2から兵役拒否と国内の雰囲気を読み取る。 ・資料3の出征直前の兵士と家族の様子から、それぞれの心情を考える。 *戦争に向かう国民の意識の高まりを読み取る。	資料1～3から戦争に向かう国民の意識に気付かせ、まとめさせる。	
・戦時における日本の経済力と戦争の推移について考える。  (15分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・戦争を支える日本の経済力について考える。           </div> ・資料4・5から石油輸入国の内訳と輸入量の推移を理解し、石油の確保が戦争継続のために不可欠であることを読み取る。 ・資料6・7から飛行機の生産量や船舶保有の推移を理解し、戦争継続能力の著しい低下を読み取る。	資料4～7をもとに日本が次第に劣勢となる理由をプリントにまとめさせる。机間指導で活動を確認。  <評価方法> プリント記入、事後提出で確認。【思】	
・戦時の国民生活の現実について理解を深める。  (25分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・国内生活を中心に戦争の現実とはどのようなものであったのかを考える。           </div> ・資料8・9・11から、国民生活の切り詰めの様子や、空襲による物的・精神的・人的被害の大きさを読み取る。 ・ビデオ映像により空襲などの現実を理解する。	資料8・9・11から戦時の生活の厳しさを理解させる。 <評価方法> 意見発表 【技】	
・講師から体験談を聞き理解を深め、疑問点は積極的に追究する。  (40分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             講師の証言を聞くとともに、疑問点を質問して理解を深める。           </div> ・実際の体験談を聞く。関心の深い点について積極的に質問し、追究する。 ・講師からは食糧事情、空襲の様子、日常生活の様子、国民の意識などについてお話しいただく。	関心をもった部分について、的確に質問させるとともに、より深く追究させる。  <評価方法> 生徒に質問をさせる。行動観察。【関】	
・自分の意見をわかりやすくまとめて発表する。  (45分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             戦争に対する見方を授業を受ける前と対比しながらまとめ、発表する。           </div> ・授業を通して新しく考えたり、知ったことをまとめ、発表する。	<評価方法> プリント記入、提出させ、事後確認。【知】  自分の考えをまとめさせる。	
・終戦後の日本の改革のために必要な視点を考える。  (50分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・終戦後の日本がどのような国家を作らねばならないのかを考える。           </div> ・資料10の「弟の死」や、本時の学習内容から戦争の問題点を把握し、戦後の日本の再建のために必要な視点について考える。	<評価方法> 意見発表 【思】 終戦後の日本の改革の方向を本時の授業から予想させる。 <評価方法> 意見発表 【思】	

< 資料編 >

資料 1

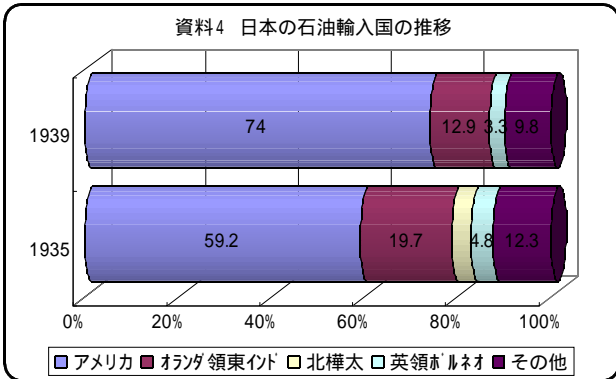
1941年の「人口政策要綱」では、初婚年齢が25歳、女子が21歳とし、1人平均5人の子を設けるようにした。これを受けて、25歳以上の男子と23歳以上の女子未婚者の一掃を女性たちが決めた都市もあった。

資料 2

俳優の三国連太郎氏は戦争の召集令状を受けましたが逃亡したそうです。しかし、孤独に耐え切れず、母に手紙を出したところ、その直後に発見され、つかまったのだそうです。密告したのは母だったのです。

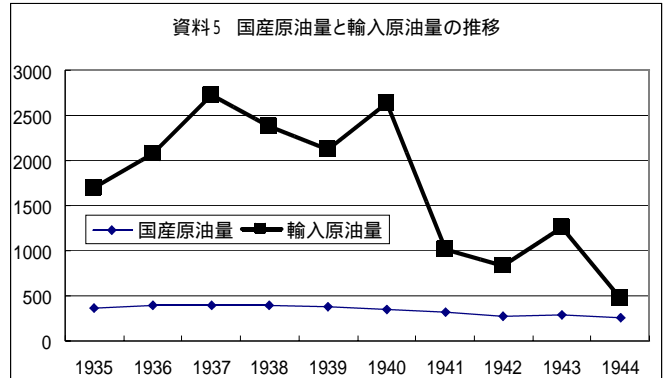
(「国防婦人会」などから作成)

資料 4



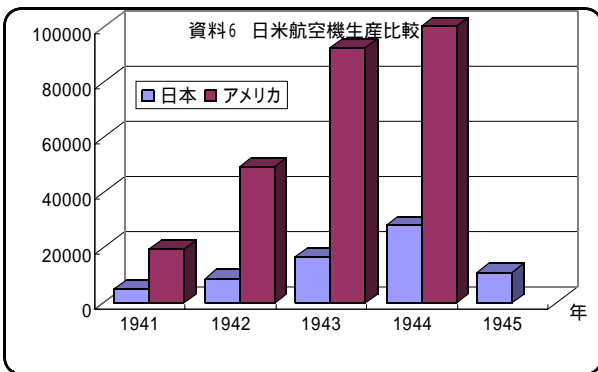
(東洋経済新報社編「昭和産業史第1巻」から作成)

資料 5



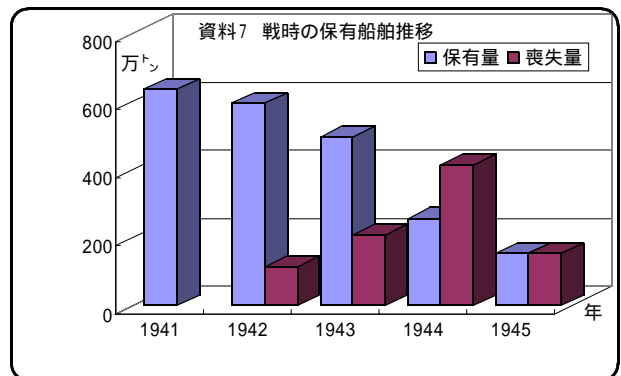
(東洋経済新報社編「昭和産業史第1巻」から作成)

資料 6



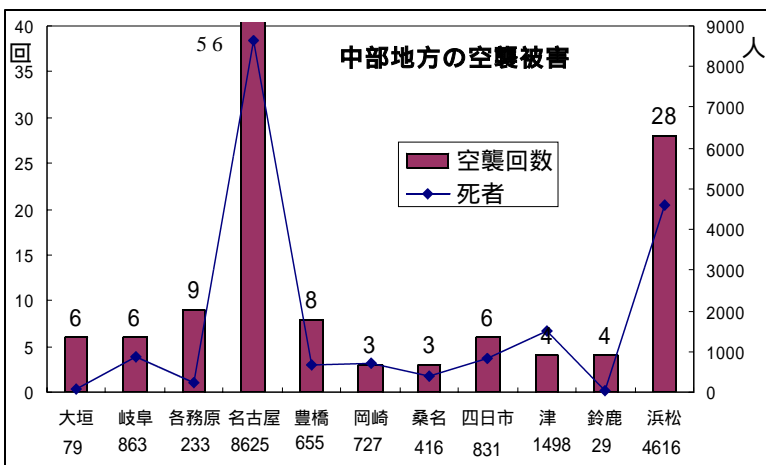
(遠山茂樹他著「新版昭和史」から作成)

資料 7



(安藤良雄著「現代日本経済史入門」から作成)

資料 11



(朝日百科「日本の歴史」第122巻12ページなどから作成)

資料 3、8、9、10 の写真は著作権の関係で掲載していない。

## 1 資料 1

戦争の拡大とともに、戦争を担う力を確保するための人口増加策が真剣に考えられた。また、女性は民族の母としての自覚のもと、早く結婚し、将来の日本を担う子女を育成する大任を負うものとされていた。1941年の「人口政策要綱」は大東亜共栄圏の発展を進めるための人口増殖を掲げている。その具体策として、結婚の奨励、出産の奨励、教育の強化をあげている。とりわけ、結婚は出産の前提条件として奨励しなければならないとされた。こうして、1942年ころ「欲しがりません、勝つまでは」とともに大流行した標語が「生めよ殖やせよ」であった。1942年2月には大日本婦人会が発足し、2000万人もの女性が組織された。町内会や部落会を単位として班が構成され、軍部や官庁の監督のもとに班を単位とした様々な戦争協力の活動にあたった。

## 2 資料 2

戦争の泥沼化と長期化のなかで政府は1937年に国民精神総動員運動を始め、また1938年に国家総動員法を発令し、戦争支持の体制が作り上げられた。部落会や隣組など国民生活の末端まで戦争協力のために組織される中、召集を忌避することは本人のみならず家族全員が日常生活を送ることができなくなることを意味した。

## 3 資料 3

出征兵士の写真から、登場人物それぞれの思いを考えさせることによって、当時の国家体制や国民意識を考えさせる。戦争に行きたくない、行かせたくないという思いの反面、出征拒否が非国民扱いを受けることなど、人々の内面の葛藤状況をより具体的に考えさせることで、戦時中の様子をより現実的に捉えさせたい。

## 4 資料 4～7

日本の国産原油は製品需要の1割強に過ぎず、圧倒的に輸入に依存していた。輸入先は仮想敵国であるアメリカをはじめ蘭領東インドや英領ボルネオであり、日中戦争はこれらの国や地域に依存して遂行されていた。特にアメリカに依存する割合が高く、しかも1939年にはその依存度が一層高まっている。日米関係の悪化とともに政府はアメリカからの石油供給の困難化を予想して、石油の備蓄に励んだが、開戦時の段階でも約2年分の量しか確保できていなかった。日本が支配した中国からは原油の産出が見られず、開戦後において支配に成功した南方の資源地帯からの輸入は、戦況の悪化とともに海上輸送路の維持が困難となったことにより、1943年をピークに減少していく。生産能力においても、日本は1940年の段階で工業生産能力をフル稼働させていたが、それでもアメリカの10分の1ないしそれ以下の、イギリスの半分ないし4分の1の生産量に過ぎなかった。船舶保有量、航空機生産能力からは日米間の工業生産能力の格差と、戦争の経過とともにそれが大きくなることが読み取れる。太平洋戦争への決断がいかに自国の経済力を無視したものであるかがわかる。

## 5 資料 8～11

資料8では国民生活の切り詰めの状況を、資料9では男子の動員による働き手の不足を、資料10では戦争による家族生活の崩壊を、資料11では身近な地域の空襲による被害の実態を取り上げ、戦時における国民生活が極度の耐乏と崩壊の危機に瀕していたことを読み取らせたい。

## 6 講師

講師からの経験談の聞き取りは、戦争をより身近に考えさせるために実施する。特に生徒が関心を寄せている部分については質問をさせながら、追究させる。戦争経験者の高齢化により体験の語り継ぎが年々難しくなることが予想される。適切な人材を探したり、発言内容の公平さや客観性については事前に打ち合わせをする。今回は生徒の家族にアンケートを行い人選した。

## 7 ビデオ視聴

NHKの「映像の世紀」の1コマで激しい空襲の様子を提示する。本校の当時の様子も写真で紹介する。

## 8 資料提示

資料提示にあたってはプレゼンテーションを用いる。

## &lt;単元の全体指導計画&gt;

## 第10章 近代日本とアジア

## 5 第二次世界大戦

- ・ 1時間目 「日中戦争の開始」
- ・ 2時間目 「第二次世界大戦と太平洋戦争」
- ・ 3時間目 「戦争と国民生活」(本時)
- ・ 4時間目 「戦局の展開と敗戦」

### 「課題追究型学習の成果と課題」

2年間にわたり新学習指導要領のねらいに沿った授業改善に取り組んできた。地歴・公民科の授業はどうしても教師による講義形式になりがちで、生徒の興味・関心・意欲を高める上で限界があると言わざるを得ない。従って、今回の研究では生徒各自の関心・意欲を高め、主体的に追究がなされるような授業を構築することをテーマに改善を試みた。

そこでまず生徒に疑問や課題意識を持たせ、自らの調べ活動によって解決していく授業構造を基盤とした。自己の疑問や課題意識がより明確化されるからであり、生徒の課題追究に向かう姿勢を高める上で有効であった。

また、調べた内容はレポートにまとめさせるとともに、個人やグループを単位に発表させることとした。表現力や創意・工夫の意識を高めるためである。発表の方法は限定しなかったが、将来的にはプレゼンやWEBページ作成に到達したい。活動の単位はグループと個人をそれぞれ展開してみたが、グループ形式の場合、一連の活動が一部の生徒任せになってしまう場合もあった。従って、扱う内容や生徒の関心・能力等によって活動単位を変える必要がある。このことは活動の進めかたについてもいえることで、何をどうやって調べるかといった調べ方の学習との両立をいかに図るかなかなか難しいところではあるが、関心が低く、基礎知識があまり身につけていない生徒に対しては比較的興味を引き易い題材から入ること、また、調べる項目や調べる資料なども予め準備する必要がある。授業形態についても様々な発想が必要である。おりから「開かれた学校作り」が話題に上っている時期でもあり、外部講師や各種史跡・資料館などの活用も今後大いに検討していきたい。

授業実践を終えて一番感じたことは、私自身が生徒個々の関心や適性・能力等をいかに掴んでいなかったかという反省である。日頃黙々と授業をうけている生徒が実に生き生きと課題に取り組む。一斉授業では見えなかった生徒の個々のよさや個性がつかめ、故に、それぞれに応じた個別的なアドバイスが可能で、能力・適正等の伸長にも大変有効であった。実際の生徒の自己評価からも関心・意欲が高まったとする生徒の割合が圧倒的に多く、ねらいの一部は達成できたと感じている。

ただ、課題も多く積み残された。例えば、評価に関しては、それぞれの単元の到達目標の明確化や、評価の方法の改善である。生徒の活動を的確に評価しないと授業の成果を高めることは難しいからである。また、いくつかのテーマを設定して選択的に取り組ませる場合、自分の取り組んだテーマについてはよく理解できても、他のテーマについての理解が深まらないという問題もある。関心・意欲は高まったが、調べた内容を深く吟味したり、他の関連する事項と結びつけて考えたりする思考・判断力はあまり高まったとはいえない面もあった。従って、個々の生徒を注意深く観察したり、より適切な支援を行うために、複数教員（内容によっては複数教科にまたがる）による展開も視野に入れる必要がある。

今回の授業研究では数時間をかけて展開したが、授業時数が減少する中で知識理解度の向上との両立をすすめるうえでは、これだけの時間をかけることはなかなか困難である。数時間単位の取組でなくとも、1時間の授業の展開を工夫することによって同じ効果が期待できる方法もある。今回の反省としてそのような授業展開例をより多く開拓することも重要であると考えている。

最後に、やはり実践する上でものをいうのは教師自身の日頃からの教材研究である。授業構築にあたってそのモチーフや発想がなかなか得られない。私自身今回の実践の中でそれを痛切に思い知らされ、最大の反省となった。今後もこの教訓を糧にして生徒が生き生きと意欲的に取り組む授業を1時間でも多く実践していこうと思っている。